第17回年次大会（長野）と協会の生き残り

会長　　森　孝晴

今年の大会は初めて長野で開催しました。上田市は「天地人」にも出てくる真田幸村の居城として知られる上田城のある、風光明媚で美しいところでした。こんな素晴らしいところに位置する長野大学で大会を開催できましたことに対し、まずは、会場校ですべてをお世話くださった小林一博氏に深く感謝したいと思います。人数はやや少なかったものの、北は北海道から南は鹿児島まで参加者があり、全国大会らしい体裁を保ちました。ご参加いただいた皆様に心からお礼申し上げます。

今回の大会では二つの変化がありました。ひとつは、17回にして2回目の（1回目は第10回記念大会）シンポジウムが実施されたことです。会員からの提案を受けて久しぶりに行われたものでしたが、テーマは代表作品ですから一般会員にもわかりやすく、かつ研究的にも質の高い内容となりました。もうひとつは、研究誌の創設を私のほうから提案させていただいたことです。これはわが協会の学会の側面を強化すると同時に、質の向上が目覚ましい会員諸氏の業績をすくいあげたいとの思いからです。もちろん愛読者の多いわが協会にとって越えなければならない問題もあり、フロアからの意見も頂きましたので、来年の大会までに現実的で皆さんに喜んでいただけるような正式提案を練り上げることになりました。

すでに何度も触れたことですが、格差社会の進行とともに、派遣切りなどに代表される国民生活の危機が広がっています。たとえ大企業や大学に勤めていても何一つ保証はないという状況です。そんな中で半ば当然のように文学や小説のようなものは実用的でないとして敬遠され無駄扱いされる風潮が続いています。しかしロンドンなどはそういう時にこそ読まれていい内容を持ち、また皆さんのように文学のまさに実用的な面を理解しておられる読者も少なくないことも事実です。

そこで、小林多喜二ではないですが、我々もそれぞれがロンドンを売り出す努力をすべきでしょう。もちろん私も、少なくとも鹿児島では、地元で知名度の高い薩摩藩士や作家とロンドンとの関係を広めています。鹿児島の会員数は増えつつあるものの読書会への参加が思うように伸びないという問題もありますが、4つの会の会長をする中で宣伝していますので、鹿児島でのロンドンの知名度が上がっていることは確かです。

いま学会の世界では、それぞれの学会が研究のレベルを上げることが求められ、会員のレベルが認められることが会の存続を左右するところまで来ています。我がロンドン協会の一般会員を含めた研究レベルはかなり高いと自負しております。一方で楽しく自由にロンドンを読んで愛読者同士が気楽に語れる面を読書会活動などで引き続き強化しながら、一方では一般会員も含めた会員全体の研究の質を上げその業績を正しく評価し、（エッセイ集出版のように）世に問うていくことが、厳しい時代にあって―バックのように―ロンドン文学を愛する我が協会の生き残りを可能にするのではないかと考えているところです。今後とも一層のご理解とご協力をお願いいたします。

(2009/08/28)